

2013年7月28日 礼拝説教（要約）

聖書 ヨナ書1章1節～16節

説教 「神からの逃亡」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

ヨナ書は旧約聖書の中でもひととき異彩を放つユニークな書物です。いわゆる預言書とはずいぶん雰囲気違います。ここにあるのは、ヨナの語った預言の言葉ではなく、預言者ヨナについての物語です。本書ではヨナが預言者であるとも言われてはいません。彼は預言者として立つことも遣わされることも拒否して逃亡するのです。けれども不思議な形で引き戻され、結局神の言葉を持ち運ぶ者とされます。この逃亡し、挫折するヨナの姿に、私たちはほかならない自分たちの姿を見出すのではないのでしょうか。

第1章はヨナの逃亡物語です。古来、預言者たちは皆、神の召しを受けたとき、恐れおののき、自分はそのようなことはとてもできないと言って辞退します。ヨナも「さあ、大いなる都ニネベに行ってこれに呼びかけよ。彼らの悪はわたしの前に届いている」との御声を聞いたとき、驚き、恐れたに違いありません。けれども、彼は他の預言者たちのように反論し、辞退するのではなく、一言も語らずに黙って、耳を塞ぐようにして、ひたすら主のもとから逃げ出したのでした。

ヨナはヤッフアの港に下り、タルシシュ行きの船に乗り込みます。ニネベとは正反対の方向に向かうのです。そして、舟に乗ったヨナは船底に下りてぐっすり眠り込みました。主の招きを振り切ろうとしたのです。

しかし、私たちは神を振り切ることができるのでしょうか。もう神さまのことを忘れようと思って忘れることができるのでしょうか。

主なる神は大風を送り込まれ、ヨナの乗った船は砕けそうになります。皆が騒ぎ出してもヨナはなお船底で寝ていましたが、やがて船長に「こんなときに寝ているとは何ごとか。あなたもあなたの神に祈れ」とたたき起こされます。隠れていたヨナは、あなたはいったい何者かと乗組員たちの質問攻めにあい、自分は今、天地の創造主である神の前から逃げてきた者だということを白状せざるを得なくなりました。

神を知るヨナと異邦人たちとの間の本来あるべき姿とは反対の光景が皮肉っぽく描かれています。ヨナは神を知りながら、神をあがめず、神に祈らず、神に従おうとしていないのです。一方、ヨナを取り巻く異邦人は、敬虔で善良で、一所懸命神に祈り、船が転覆しないように必死に働いているのです。こうした光景を、私たちは他人事のように聞くことはできないでしょう。ヨナは神の民、教会の代表です。教会は今日、危機に満ちたこの世の中で、周囲の人々から尋ねられているのではないのでしょうか。あなた方は祈っているのですか。神を信じているのなら、この世の救いのためにもっと真剣に祈るべきではないのですか。それらしく振舞うべきではないのですか、と問われているのではないのでしょうか。

教会がなすべきことをしないとき、神は教会になすべき務めを思い起こさせるために

信仰なき人々を用いられます。この世の人々の方が、この世の危機回避のためにはるかに真剣に努力し、戦い、祈っているのではないかということを考えてみる必要があります。私たちは、偽りの平安のうちに眠り込み、祈りなく過ごしてはなりません。

ヨナは、ここに来て、嵐の原因が自分にあることを素直に認めています。それで、「あなたをどうしたら、海が静まるのだろうか」という人たちの問いに、彼は大胆にも「わたしの手足を捕らえて海にほうり込むがよい」と言っています。これはどういう心境でしょうか。おわびして死のうといるのでしょうか。自分を犠牲にして船を助けようとする献身的行為でしょうか。聖書は何も説明していませんが、ヨナが未だ神に祈っていないことを考えると、ここでも神の言うとおりにしたくない、神に降参はしない、こうなった以上はもう死んでもよい、死んでしまったら神さまだってどうすることもできないだろうと息巻くしたたかたか、ふてぶてしい決意があるように思えます。

いよいよ海が荒れるにいたって、船乗りたちは、仕方なくヨナを海にほうり込みます。すると、ヨナが言ったとおりに、荒れ狂う海は静まり、人々はヨナの信じる天の神、主を畏れ、主にいけにえをささげ、誓いを立てたというのです。

私たちは、ヨナがいけにえとして海に放り込まれることによって、船の人々が命を助けられた出来事を通して、自らの死をもってすべての罪人の救いの道を開かれた主イエス・キリストの姿を思い浮かべることができます。この人類と世界を、神の怒りから救うために、自らをいけにえとして神にささげられた御子イエス・キリストによって、私たちは救われたのです。もちろん、その人格からしても、出来事の経過や内容からしても、ヨナと主イエス・キリストとは比べようもなく違います。それでも、主イエス・キリストはご自身のやがて経験される十字架と復活を「ヨナのしるし」（マタイ 12：38 以下）というふうに呼ばれました。神からひたすら逃げていくヨナを、主はご自身の救いの証人となさったのです。

このヨナ書1章のキーワードは「下る」という言葉だということがよく言われます。彼はまず「ヤッフアに下り」、船に「乗り込み」、「船底に降り」ます。すべて「下る」という言葉です。最後に、彼は海に放り込まれます。しかしそこで、神は巨大な魚を用意しておられました。下へ下へと逃げていきますが、もう下りようのないところで、神はヨナを受け入れられたのです。「陰府に身を横たえようとも、見よ、あなたはそこにいます」（詩 139：8）とあるとおりです。一人の人間を選ばれる神は、その人をどこまでも追い求められます。それは、その人を追い詰めて困らせるためではなく、その人を、どうしてもご自身の働きの中で用いたいと願っておられるからです。